

い。東京都立大学牧野標本館にある *var. yezo-alpinum* の *syntype* 標本を観るといづれも桜井博士の記文にあるように密な蘚座をなし、少数の枝を二叉分枝で出し乍ら直立して、高さ約 3~4 cm に達している。乾燥状態の標本で植物体は茶を帯びた色をしている。葉形は卵形の基部から披針状に伸び、葉身上部は *var. canescens* よりやや長く、葉縁の外への捲き返りが幾分ゆるやかである他は外観上は *var. canescens* によく似ている。しかし細かく観察すると葉基の細胞は膜がより規則的に波打ち、*var. canescens* に見られるような大きくて高いパピラがない。葉先の透明尖について桜井博士は“*rarius hyalina*”と言っておられ、確かに葉先は鈍またはやや鋭頭で透明尖は稀である。しかし沢山の葉を調べてみると僅かに透明尖を持つものがあって、それらの葉では透明細胞は葉先のみでなく、葉先から葉縁に沿って下方へ伸びている。この透明な細胞上には僅かながらパピラがあり、また外縁はやや欠刻状になるものもあり、細胞は扁平で *var. canescens* のもののように管状になる形跡はない。これらの性質を合せ考えると *var. yezo-alpinum* は *R. canescens* より *R. lanuginosum* の透明尖の発達の悪い型と考えた方が良さそうである。ちなみに *R. lanuginosum* は主茎は直立して枝を分ち、植物体の色は、黒緑、類黒、茶、灰緑色と変化に富み、その透明尖はふつう顕著で葉先から長く突き出るが、*R. canescens* の場合と異り、管状にならず、又葉の縁に沿って長く下方にまで及ぶのが特徴である。*R. lanuginosum* は周知のように広分布種で且つ変化に富む植物で、桜井博士の変種もこの種の下で書かれた多くの変種、品種のどれかに該当するであろう。しかし筆者はこのような変種や品種を区別する必要はないと思うので次のように扱い度い。

***Racomitrium lanuginosum* (Hedw.) Brid., Mant. Musc. 79 (1819)—*R. canescens* (Hedw.) Brid. *var. yezo-alpinum* Sakurai in Bot. Mag. Tokyo 51: 141 (1937); Musci Japonici 64 (1954)—syn. nov.**

又 *R. canescens var. yezo-alpinum* の原記載文には二点の標本が *type* の指定なしに引用されているが、その中の一点、no. 9217 の標本は包紙上に桜井博士の筆跡で (*type*) と記されており、記載文ともよく一致するので、この標本 MAK B9217 を *lectotype* に指定したい。  
(東京都府中市 [REDACTED])

○小笠原諸島のシダ拾遺 (1) (大場秀章) Hideaki OHBA: Additional notes on Pteridophytes of the Bonin and Volcano Islands (1).

小笠原諸島のシダ植物について一応のまとめを行った (東北大学理科報告 生物学 36: 75-127 (1971))。その後新たに見い出された種類や近縁種との比較研究の結果を逐次記してゆきたいと思う。

(1) *Woodwardia orientalis* Sw. *var. formosana* Rosenst. ハチジョウウカグマ  
1970年5月山崎 敬・榎本克彦両氏によって北硫黄島の海拔 200 m の地点で採集さ

れたハチジョウカグマは従来小笠原諸島に記録のなかった種類である (本誌 46: 277)。ところがコモチシダ属のシダとしては、1848年 Kunze がオオカグマ *Woodwardia japonica* Sw. の父島産を Mertens no. 7 H. 54 の裸葉の標本をもとに報告している (in Bot. Zeit. 1848: 522)。従って、小笠原諸島にはコモチシダ属のシダが2種類あることになる。しかし、オオカグマについてはその後誰も本諸島で採集していないようである。また、植物地理上小笠原諸島と密接な関連をもつ琉球や伊豆諸島にもオオカグマは分布しておらず、この Kunze の報告には疑問の余地がある。他方、ハチジョウカグマの分布域は九州、四国をはじめ、琉球各島、伊豆諸島の青ヶ島、八丈島、御蔵島、三宅島、神津島、大島を含み、房総半島まで達している。小笠原産のシダで本種のほか琉球と伊豆諸島に共通に分布する種類の多くはマツバラシ、ユノミネシダ、ヘゴ、ケホシダ、コヒロハハナヤスリなどの広域分布種で、本諸島産シダのうち26種類あり全体の<sup>26</sup>/<sub>78</sub>、即ち約33%を占めている。上記の Mertens の標本をまだ検討できないので断言できないが、それはハチジョウカグマを誤認したものではないかという疑いを表明しておきたい。

採集されたハチジョウカグマの標本は2点で、いずれも葉長1m位あり羽片は羽状深裂し、裂片の先は細長くやゝ尾状にのびている。葉脈の網目も細かく、外部形態上既知の変異の域をはみだす性質はみられなかった。

*Woodwardia orientalis* Sw. var. *formosana* Rosenst. in Hedwig. 56: 334 (1914); Tagawa in Acta Phytotax. Geobot. 5: 174 (1925); Col. Illust. Jap. Pterid. 144 & 262 (1959); T. Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 46: 277 (1971).

‘*W. japonica* (L. f.) Sw.’—Kunze in Bot. Zeit. 1848: 552, versim.

Specimen examined: The Volcano Islands. Is. Kitaiwojima, alt. 200 m, ‘on bank along the stream’ (T. Yamazaki & K. Enomoto 316, TI).

(東京大学総合研究資料館植物部門)

### ○レンブクソウのイリドイド配糖体について (遠藤 徹) Tohru ENDO: On the iridoid glucoside of *Adoxa moschatellina* L.

レンブクソウ *Adoxa moschatellina* L. (Adoxaceae) は1科, 1属, 1種で合弁花亜綱, アカネ目に含まれる。最近, スイカズラ科, アカネ科等から数種のイリドイド配糖体が単離され, ケモタクソノミーの見知から二, 三論議されている。<sup>1)-3)</sup>

1970年東京近郊で採集したレンブクソウ 1.2 kg を生のまま粉碎してメタノールで冷浸し約 50 g のメタノールエキスを得, これを活性炭クロマトグラフィー, 及びシリカゲルカラムクロマトグラフィーに付して 70 mg の無色粉末の粗配糖体を得た。これを常法通りアセチル化を行い, 更にプレパラチブ薄層クロマトグラフィー (TLC) にて